

1——盛／正装の着物

●……………ある一枚の広告より

神社の手水舎にて互いを見つめ微笑みを浮かべる母娘は、判然ではないが、秋の季節薫る秋草、邪気を払い長寿を願う菊、末広がりの吉祥を示す扇などが描かれた絵羽模様の着物を纏っている。腰上げをした本裁ちの振袖にしゝきを締めている娘の姿は帯解きの七歳を奉告する七五三の光景であろう。右端には「おそろいのきものに晴れの日の喜びもひとしおです」との惹句が添えられている図1。

これはある日の新聞に掲載されたたんなる一枚の広告などではない。後述するように、それは幾重もの意味において、60年代以降のわれわれの着物へのまなざしを象徴するものである。かつて拙稿にて記したように、人びとは終戦後も着物に袖を通し、普段の日々の暮らしを営んでいた。こうしたなかで従来の着物の枠組みを越境する広巾の生地を使用したもの、あるいは二部式やワンピース型の更正したものといった〈新しいキモノ〉が考案されていた。そして、〈新しいキモノ〉は戦後の婦人解放という新たな時代の理想を希求する多くの女性たちの意識と共振するだけではなく、レーヨンやアセテート、ナイロンなどといった、われわれの新たな皮膚感覚をひらく化学繊維の飛躍的な成長と結び付いて展開されたものであった註1。

けれども、こうした姿はこの時期を迎えるとはとんど看取されえない。それに変わつて現出する新たな着物の形象とは、さきに記したような「晴れの日の喜び」を祝う風景である。それはまさに非日常のときを彩る、盛装の着物である。では、人びとは高度経済成長期を経るなかで、このような着物にいかなる夢幻を読み込んでいったのだろうか。また、生活着であった着物が盛装

の非日常着へと変貌を遂げるなかで、どのような言説が生み出されていたのだろうか。ともあれ、まずここでは着物がわれわれの非日常着となること、盛装の着物としてあらわれた状況より追尾していくこととしたい。

●……………着物の高級化と女性の幸福

「もはや戦後ではない」といわれ、日本社会が神武景気にはじまるいわゆる高度経済成長期を迎えるなかで、着物は人びとの日々の生活から少しずつ緩やかに姿を消していく。しかしながら、それは決して着物そのものの終焉を意味していない。着物はさきの広告に象徴されるように、ハレの日の非日常の衣服として生き残っていく註2。こうした変化はいくつかの側面より垣間見ることができる。たとえば、「天井知らず 晴着アーム」と題された新聞記事ではつぎのように記されている。

絹織物や生糸業者の団体である日本絹業協会の調べでも、三十八年ごろまで女性一人当りの絹織物の消費量は年間三人に一反の割合だったのが、昨年は一人に一反、今年はもつとハネ上がりそう。とくに成人式や正月、結婚式などに使われる晴着用の訪問着や中振りそでの伸びがすさまじく、…中略…このことは、結婚前の若い世代の所得がふえるにつれ、需要も爆発的にふえていることを物語っているようだ。東京都内の百貨店でも「豪華でつやのある晴着が若い世代の間でとくに人気がでてきた。ますます高価なものが好まれるようです。平均すると昨年より一五%から二〇%ほど値段は高くなっているでしょう」という。(註3)

このように、この時期の新聞では、これまでの既存の着物を改良する(新しいキモノ)に関する記事にかわつて、成人式や正月、結婚式などにて着用される盛装の着物の流行を伝える記事が数多く散見される。事実、経済企画庁委託の国民生活研究所が1962年に調査した「大都市における消費者の意識および行動」によると、結婚式では洋服ではなく圧倒的に着物が採用されることが多く、次いで正月や同窓会、観劇などにおいても着物を纏う人びとが多い註4。その他にもやや曖昧な調査だが、着物を着るときが「①冠婚葬祭76%②正月など特別の場合36%③特別な訪問34%④PTAや入学式37%」といったデータを示している記事もあり、着物はこうしたハレの日や特別な行事の際に袖を通す非日常着としての役割に活路を見出していく註5。

また、日本絹業協会や藤平昭によれば、和装用の絹の着物の消費は1959年から68年の約10年間で約15万俵から約30万俵へと倍増したとされる。そもそも着物を大別すると先染めと後染めの2種類がある。先染めは糸を染めた後に反物を織るもので、袖やお召、銘仙などがある名であり、主に日常着の着物とされる。一方、後染めは白生地を織った後に手描きや捺染などにて染色するもので、振袖や訪問着、小紋などが有名であり、主に外出や公式な場での非日常としての着物とされる。倍増した着物の消費のなかで、表1にあるように、先染め表地は59年に472万反、68年に442万反とほぼ横這いだが、後染め表地は650万反から1306万反と約2倍にまで増加している(表1)。また、構成比も先染めは42%から25%、後染めは58%から75%へと移行している。このことから、一般的に高級とされる後染めの、非日常着としての着物が多くを占めて流通し、消費されていたことがわかる(註6)。

では、一方の、日常着である袖やお召、銘仙などはどうだろうか。表2はお召、銘仙、大島、袖織の4つに区分されたデータである(表2)。まず、大きな特徴を示しているのは銘仙であろう。銘仙とは屑繭や玉繭からとった太めの絹糸を用いた安価な平織の絹織物で、戦前に開発普及し始めた合成染料によつて数多く染め上げられ、その奇抜な彩度と、アールヌーボー調やアールデコ調といったモダンなデザインとによつて編まれ、大正から昭和初期にかけて流行した日常着であった。それが戦後のこの頃にはほとんど下火になっている。

お召も同様に、その生産高は270万反から

年	先染め表地	後染め表地	表地合計	先染め構成比	後染め構成比
1959	472	650	1122	42.1	57.9
1963	348	770	1118	31.1	68.9
1966	410	1125	1535	26.7	73.3
1968	442	1306	1748	25.3	74.7

表1：先染め表地と後染め表地の推移と割合

単位：万反、比(%)

年	お召	銘仙	大島	袖織	合計
1959	270	113	32	7	472
1963	236	11	36	9	348
1966	204	10	61	21	410
1968	127	1	76	93	442

表2：先染め着尺生産高

単位：万反

著作権の関係により
表示できません

図1：『読売新聞』1968.9.8

127万反へと、約半分にまで減少している。ただ、これまで多く参照してきた『美しいキモノ』などをみてみると、縫取お召やマジョリカお召など、非常に手の込んだお召が度々とりあげられている。なかでも、戦後新潟の十日町を中心に、地中海のマジョリカ(マヨルカ)島の陶器をイメージして誕生したとされる洋柄のマジョリカお召は非常に有名で、金糸や銀糸がふんだんに用いられた高級なものであり、「デラックスな御召の晴着」などと当時の誌面にも紹介されている(註7)。すなわち、それは従来の日常着としてではなく、ある種の洒落着として認識されていたといえる。お召が銘仙ほど低調とならなかつた要因には、こうした背景があつたからだろう。

反対に、大きく伸張しているのは大島と紬織である。大島も紬の一種であり、紬とは屑繭をつぶした真綿より紡いだ糸によつて織られた絹織物である。紬には鹿児島県奄美大島の大島紬をはじめ、東京都八丈島の黄八丈、茨城県、栃木県の結城紬、石川県の牛首紬などがあり、その地域やその土地特有の製法や風合がある。とくに雑誌などではこの時期より、日本を巡るよううにして各地のさまざまな紬を紹介する特集が組まれることもあり、これらもまた趣味の着物として人びとに楽しまれていく。事実、生産高は32万反から76万反、7万反から93万反と、それぞれ約2倍、約13倍へと増大している。

このように、高級な振袖や留袖、訪問着といったハレの日の、非日常的な盛装の晴着が中心を占めるとともに、これまでの紬やお召といった日常生活の着物もまた高級化していった。それは着物の非日常化であり、高級化である。けれども、ここでさらに興味深いことは、こうした新聞雑誌にみられる着物を扱う記事や広告のほとんどが、女性の幸福を表象していることである。母娘が着物を纏い、互いに笑みを浮かべ、七五三というハレの日を祝うひととき。さきの広告のように、多くはこのような一場面を描いている。すなわち、ここでは母にとつても、また娘にとつても、こうしたハレの日に着物を着ること、着られることが、女性としての幸せであることが共示されているのだ。ただし、それはたんに女性の幸福に留まらない。それらは女性の生涯の、一生の幸福を映し出している。二十歳を迎えた成人式と(短期)大学の謝恩会での振袖、自らの結婚式での打掛、母となつた七五三での訪問着、子どもの入学式やPTAでの(黒)羽織、夫の部下や自身の子どもの結婚式での留袖、そして先立つ夫の葬儀での喪服(図2)。当時の多くの女性たちが辿るであろうライフコースのなかで、その節目となる時々々の傍らには常に着物があること。もちろん、記事や広告がこれほどまでに半生と着物のリンクを直截的に描くことはない。しかしながら、各号には少なくともいづれかの着物特集が組まれており、また後述する、着物を着るさまざまなシチュエーションを紹介する記事に目を通すとき、その表象は明らかである。振袖や訪問着、留袖といった盛装の着物を、齢を重ねるうちに必ず訪れるハレの日に着ること、着られることが、この時代を生きる女性たちの幸福であることが内包されている。そして、ときにはイメージの位相のみならず、より直截的な言葉をともしなつてつぎのように語られる。

晴着といわれるようなきものはますます豪華にぜいたくになつてきましたから、このお正月あたり、総絞りの中振袖が全盛をきわめるかと思います。…中略…また絞りだけでは満足しないで、そこに刺繍で模様を加え、これでもかこれでもかというような豪華さです。すべての技術が進歩し、色彩も模様も洗練されて、豪華といつてもてこてしているのではなく、すっきりとした新しい感覚に消化されているのです。これは晴着だけでなく、きもの全般にわたつていえることです。…中略…戦後の何年間か、きものの淋しい時代が続きましたが、そのころには考えもおよばなかつたような今日の隆盛を見ようとは、だれだつて想像もつきませんでした。それにつけても現代に生きて、すばらしい現代のきものが着られることを、女性は心から喜ばなくてはならないと思います。(註8)

●……………「正しい」着物という教育

生活着としての着物が後景に退き、高級な盛装の着物が一般化していく。同時に、そうした非日常的な着物のなかに、女性の一生の幸福という意味が暗示される。かつての〈新しいキモノ〉という形象はそこにはもうない。変わつて60年代以降の形象とはまさにこうした着物たちであり、人びとはそれらを具現するひとつひとつに憧憬を抱く。では、このように女性の幸福としての盛装の着物という輪郭が浮かび上がるなかで、具体的にどのような言説が紡がれていたのだろうか。たとえば、以前にも拙稿にてとりあげた大塚末子は「絹のキモノを語る」という座談会において、記者が大塚の〈新しいキモノ〉の実践にふれた後に、以下のような発言を行つている。

記者——体系的に変わりましたでしょう、そういう意味で、先生なんかが新しいキモノを作つて下さつたんですけれども。

大塚——キモノというものは、非常に完成された美しさをもっている。もう、すでに。染めものも織りのものも、いろいろございますけれども、われわれ日本人の女体を包むべきキモノというものは、どんなに、これはやり直そうといつても、私は完成させているものをもつていると思う。…中略…私は、戦前と戦後とどう変わつたかを、考えてみますと、それほど変わつていないということは、変える分野がないということがいえるんじゃないかと思います。(註9)

〈新しいキモノ〉とは形態や着付け、生地などのさまざまな視点から、現状の着物の問題をとりあげ、積極的に更正し、既存の和服と洋服の境界を越えようとする試みであつた。だが、ここではなにか〈新しいキモノ〉がすでに過去の実践として顧みられ、さらに着物には「非常に完成さ

著作権の関係により
表示できません

著作権の関係により
表示できません

れた美しさ」があり、また「変える分野がない」とまで述べている。線を横断したり、線そのものを問うのではなく、線を固定し、線の存在を強調する。そこには着物に対する転倒した姿がある。大塚をはじめ新しいキモノを提唱していた多くの人びとは、このように立場を変えていく。だが、ここでは決して彼女らの転向を批判したいのではない。重要なことは、着物が人びとに与つての非日常性となるなかで、より具体的にどのような言説が紡がれ、相互に結び合つていたのかといふことである。なかでもつぎに記す〈新しいキモノ〉を推奨したひとりでもあつた小沢喜美子の言葉は、やや冗長だがこの時期のもつとも典型的な着物の言説をかたちづくつてゐる。

たしかに和服のシルエツトは、新しい生命を吹きこまれて再生したことに間違いはありませぬし、このキモノブームが和服の復活にひとつのキッカケとなつたことも事実でした。しかしほんとうの意味で、若い人たちが正統和服―伝統という背景をふくめて、和服を理解するようになったかどうか、ということになりますと、なんだか心細いのです。花にたとえていふならば、珍らしい洋花にわつと好みが集まつてしまつて、日本の昔からの花々を忘れてしまつたという状態に似てゐるのですた。…中略…

冬衣裳から袷となり、単衣のまえの、青葉のころにはネルやセルが着られました。夏に入りますと、肌にそわないような麻・紗・絹の薄物が用いられましたが、それらはただ涼しいというだけではなしにその季節以外は、着てはならないことになつてゐたのです。お召や結城にしましても以前は日常着で、訪問着などにしては、先方に対して失礼に当るといわれておりました。少し改まつたときには、かならず小紋や友禪を着るのが礼儀であつたのです。…中略…

ハイカラな言い方をすれば、これらのことは和服のマナーということになります。洋装にしてもやはり作法というものがあります。このころでは若い人たちの間でも、なにかとむずかしい洋服のしきたりを覚えられて、アクセサリーを一選ばれるにも立派な御意見をのべられるようになってきました。いまの若い方は、日本の民族服である和服の伝統をうけつぎ、守りそだてていく方でもあるはずです。キモノブームの盛りあがり方が和服の伝統を正しくつたえたる基礎になつてくれることを念じております。註10

「珍らしい洋花」である〈新しいキモノ〉は着物の再生の一翼を担つた。だが、人びとは「日本の昔からの花々」を忘れてしまつてゐる。それは「和服のマナー」である。袷と単衣にはじまり、時期にあわせたさまざまな生地、季節に適した着物の模様、そして目的に応じた着物の格。着物にはこうしたいくつかのルールや作法があり、それらを入びとは理解しておらず、身に付ける必要がある。そして、われわれはこのような「日本の民族服である和服の伝統をうけつぎ、守りそだて

1…立つたとき

背筋を伸ばし、右足を半歩前に出し、両膝を内側に向けて合わせます。左右の足先の位置は、「ハ」の字を描くように。これが柔かものを着た時の、もつとも基本的で自然なポーズです。…中略…

4…歩きかた

両膝を合わせ、足先は「ハ」の字のポーズで立ち、後にある左足から歩き始めます。右足から歩き始めると、裾さばきが悪く、美しくありません。上前裾を自然に美しくさばくためには、左足から歩き出しましょう。註13

ここではこのほかに「おじきをするとき」、「坐るとき」、「階段を昇るとき、降りるとき」など合計で7つの動作がイラストをともなつてとりあげられてゐる。他の記事ではより理解しうるように、コマ送りのごとく、ひとつひとつの動作を写真つきで解説しているものもある。こうしたなかで、とくに驚くべきは「街で見たきもの」という誌面である。これは着物姿をした人びとの、街頭スナップを集めたもののだが、その一人ひとりに、つぎのようなかなり手厳しいコメントが添えられてゐるのである。

- 1…ご披露宴もすんで新婚旅行へ出発の新郎新婦のお見送り。…中略…中振袖の着つけはご立派で余り着くずれてゐないのは感心です。ただ、足の開き方だけは、氣になりますね。
- 2…留袖の着こなしはむずかしいものなのにこの奥さまはお上手。ヘアもすっきりとまとめて結構ですが、頭を搔くポーズだけはいけません。
- 3…風の日のきものは全く困りもの。それにしても、もう少し裾さばきに神経を使つてはいかが？（註14）

このほか車の乗り降りの姿勢や歩き方など、撮影された市井の人びとの一瞬の動作がひとつひとつ細かくチラクされている。「正しい」着物では、たんに指南書のような「方通行路ではなく、写真というメディアを通して、実際に着物を纏う姿が捉えられ、おそらく彼女ら自身の意図とは関係なく教育的な指導がなされる。読者は頁を捲ることで「正しい」着物という視線を身に付けるとともに、そうした視線を自身や他者にも向け、また袖を通した際には誰から同じような視線が自らにも向けられてゐるのではないかという、「正しい」着物のまなざしが醸成されていく。「正しさ」とはたんなる上意下達ではなく、最終的には街ゆく人びとの、相互の編み目のなかに不可視だが明白なすがたとなつて張り巡らされる。

ていくべきである、と。

盛装の着物とはまさに正装の着物なのだ。着物が高級な非日常着として生き延びるなかで、まずはひとえに「正しい」着物を纏うことが謳われ、求められていく。この時期には形象のその一部をなす、「正しい」着物の言説が「美しいキモノ」をはじめとする当時の新聞や雑誌にて数多くみられる。なかでも興味深いことに、「正しい」着物の詳細をみると、もちろんそれらは大抵の場合ない交ぜとなつてゐることが多いのだが、そのうちは大きく3つに弁別しうる。

ひとつは着物の用途である。VANの創業者である石津謙介が1965年に「いつどこでなにを着る？」を出版し、TPO（Time、Place、Occasion）という言葉が当時流行したのと同様に、記事の多くは用途に応じた着物の選択を指南する（註11）。「特集どこでどんなキモノを着るか？」は、先述した大塚が担当したものであるが、ここでは女性の幸福という表象でもとりあげた、「謝恩会に着るきもの」や「お正月を寿ぐきもの」、「お通夜告別式。法事などのきもの」といった具体的な16のシチュエーションが設けられ、その時々、どのような着物を着るべきかについて、それぞれう程の注意事項が仔細に明記されている。たとえば、「お見合いのときデイトのとき」の項では、つぎのように書かれてゐる。

●お見合いとは、結婚を条件にいうことから、まず双方が好感を持ち合う、ということが第一に大切なことだと思ひます。…中略…

●男性はセビロが多いのですから、女のほうは軽い訪問着か、附け下げ友禪の花模様、淡いサックスローズなどの品のよい色、それに朱、緑の袋帯、小さいバッグ、とにかく愛らしく装うべきです。…中略…

●生地や色、柄でいうと、個人宅の場合は訪問着よりも友禪小紋、大島、お召などのほうが落着いていて好感が持たれましようが、ホテルや観劇などでは、友禪、訪問着がよろしい。註12

どのような着物を、どのような時と場所を着るべきなのか。こうした着物の用途や格、さらにはそのときの心得などが事細かに記されている。この時期には清水ときの「べからず集」や本坂ますみの「○○の常識」などをはじめ、着物の用途について解説する記事が数多く存在する。なかには年齢別にふさわしい帯の結び方を紹介するものや、目で分かるようにシチュエーションと着物の種類を表にしてまとめているものもある。

つぎは動作、ふるまいである。着物を着た状態でどのような動きをするべきなのか。どのように動きをすれば着崩れせずに、また美しく正しいふるまいとなるのか。大関早苗の「美しいポーズ」では、「振袖のように柔かものを着るときはとくに、柔かい素材にマッチした身のこなしをしたいもの」として、以下のように説明がなされている。

最後は着方である。そもそも着物をどのようにして一から着たらよいのか。こうした解説は先述してきたように数多ある。だが、たとえば、武智鉄二の「アクションの効用——どう着るのが本当か」では、さまざまな動作の「正しさ」が紹介されるなか、その最後の「着物の着かた」という項を読んでもみると、あることに氣がつく。

日本の芸術の根本義は、息を詰めることにあるといわれますが、この呼吸作用の停止こそ、着付けアクションの第一歩といふことができるのです。必要な時に息を止め、呼吸をととのえることが、もつとも大切なのです。…中略…腰紐をしめる時は充分腹に力を入れて腰をふかく落し、息をとめていなければなりません。これが着つけの決定的瞬間なのです。この時、少しでも呼吸がゆるんでゐると、あとで全体がゆるんできます。…中略…美容師は着る人に、身体の正しい形を教えるだけの、見識を持つていなければいけません。人間はマネキン人形ではないのですから。あとは女性の線のやわらかさ、美しさをひきたせるように着せればよいので、特にむずかしいことはありません。註15

はじめは自分自身の手で着物を着る際の注意事項が記されている。けれども、それが徐々に、着物を誰かに着せつけるための心得へと移行してゐる。着るのではなく、着せつけるための着物。もちろん、着物の着方を紹介するすべての記事が、誰かに着せつけることを前提として書かれてゐるのではない（註16）。だが、そもそも、着物の着方そのものを教授する記事は、これまで既存の着物をいかに改良するべきかを問うてきた〈新しいキモノ〉の時期には、ほとんど看取しえないものであつた。そして、着方ではなく「着付け」という言葉はなにより、自分で着るという主体的かつ能動的な行為以上に、誰かに着せ付けてもらうという客体的かつ受動的な状態を含意してゐる。着せ付ける、着せ付けてもらうという行為には、明らかに、自分自身の身体と着物とのあいだの結びつきの薄い、疎遠な隔たりが生じてゐる。

着物の用途、動作、着方（着付け）。もちろん、これ以外の視点から剔出することも可能かもしれない。だが、重要なことはこうしたさまざまな角度から、この時期に教育的かつ規範的な「正しい」着物の言説が形成されたことである。人びとは華やかなハレの日の着物にあこがれを抱きつつも、それを纏うためには「正しい」方法を身に付けなければならない。そのような意味において、やはり盛装の着物は正装の着物だつたのである。

また、このような盛装の「正しい」着物の言説を担つた人びととは、しばしば戦前の上流階級出身の女性たちであることが多かった。代表的には、裏千家14世家元碩叟宗室を父に持ち、1970年に「冠婚葬祭入門」を著しシリーズベストセラーとなつた塩川弥栄子や、旧侯爵・前田利為の長女で旧伯爵・酒井忠元の妻でもあり、『和服の常識——いつ、何を、どう着るか』など多

くの著書がある酒井美意子である註17。彼女たちによって著されたのは、もちろんその出自をベースとしたものであり、必ずしも簡便で活動的な着方であるとはいえない(註18)。そして、ここでは「〇〇しなければならぬ」「〇〇してはならぬ」といったマナーやエチケットに関する事柄が中心を占めており、さらには社交術や女性としての訓諭まで含まれている。

このようにして、「正しい」着物という言説の内実は形成されていく。けれども、「正しい」着物を生み出していった外延にあるのは、こうした新聞や雑誌などのメディアによるものだけではない。むしろ、それらと連動しあるいはより先導するかたちで、「正しい」着物を実定させる装置があった。それは着物教室(着つけ教室)という教育機関である。たとえば、1964年には装道礼法きもの学院、67年に長沼静きもの学院(当時・長沼学園きもの着付教室)、69年にハクビ京都きもの学院がそれぞれ創立され、これらは全国的な展開をみせることとなる註19。

また、つぎの表は1959年度から73年度の文部省の『学校基本調査』をもとに作成したものである表3。59年度の和裁の学校課程数は737であるが、73年度には1135となり約1.5倍となっている註20。生徒数も26930から36766へと大幅に増加している。もちろん、この頃の洋裁と比較してみると、課程数や生徒数の数の面ではそれぞれ約4倍、約7倍と大きな開きがある。しかしながら、この時期の洋裁の課程数と生徒数はともに減少傾向にあり、洋裁を習うことはかつての憧憬や糊口を凌ぐ対象ではなくなりつつあった。そうしたなかで和裁のみが増加していることは注目すべき点である。また、この調査における和裁の項目は学校教育法に準じた教育機関であり、多くは国家資格である和裁技能士(和裁士)の取得を目的としたものであるといえる。したがって、着物を誂え、仕立てることも含めた総合的な和裁の技術ではなく、着物を着る／着せることにより傾倒している着物教室は、ここにはほとんど登録されていないと考えられる。ましてや、着物教室は学校や大きなビルの一室にて行われていたというより、近所の一家でひっそりと開かれていたことが多い。こうした点も考慮に入れると、この時期の着物教室(着つけ教室)の数はさらに増えるだろう。

人びとは自らの母親から、あるいは家庭のなかで着物の着方を教わるのではなく、着物教室を通して「正しい」着物の着付けを学ぶ。だが、それは何より教えることができないということに起因している問題でもあった。ある記事ではこうした実態を、つぎのように伝えている。

相変わらずのきものブーム。ボータスシーズンを迎えて、またぐんと売れ行きを伸ばしているそう。だが、そのブームの裏側ではきものは買っただけど、着付けのできない女性がめつきりふえているという。昔は母親が着付けの先生だった。が、いまはその母親だつておほつかない。そこで登場したのが、着付けの学校――デラックスな学園ビルから自宅開放の寺小屋スタイルまで、つまりピンからキリまで。それがどこもかしかも大繁盛とある。それ

上の世代にあたる、より多く日常生活のなかで着物を経験していたと考え得る、祖母の世代から教わることは環境として難しい。着物教室・着つけ教室は、こうした空白を埋めるようにして機能し、人びとに「正しい」着物を教育し、浸透させ、強固にする装置であった。着物教室に通うことは、もはや普段の日常生活には直結することのない趣味や嗜みのひとつなのである。けれども、このことは同時に後述するように、着物のみならず、われわれと衣服との関係においてより重要な変化を意味している。

●……………「伝統」の再創造

高級な盛装の着物あるいは民芸の着物が普及していくなか、それらは女性の幸福の欲望の商品として表象される。そして、こうした形象に「正しい」着物の言説が結びついていく。だが、このような結びつきのさきに、先述したような、日本の伝統服あるいは民族服といったナショナルな言葉が引き寄せられていく。もちろん、こうした論理は幕末期に洋服というこれまでとは全く異なる文化の衣服が入ってきたときから、またいままでの自分たちの衣服を対象化したときから、そして和服と洋服という二値コードの弁別が生まれたときから既に存在していたといえる。だが、この時期の着物とナショナルなものの結びつきは、開国以後の近代日本社会における関係性とは異なるかたちで現出することとなる。

高度経済成長期に、より着物と日本(人)というナショナルな結びつきを強固にしたもの、それは皇室(皇后)である。だが、そもそも皇室と着物とは決して相容れるものではなかった。異国の洋装が流入した明治初期には人びとの衣服は大きく混乱し、1871年8月には「朕惟フニ、風俗ナル者移換以テ時ニ宜シキニ随ヒ、国体ナル者不抜以テ其勢ヲ制ス」にはじまる服制改革内勅が呈示された。ここには、多木浩二が述べるように、天皇自身が「元帥ト為」り国を治める近代的な軍事国家への方向と、明治の王政復古にともなう「神武創業」による天皇の神話的正統性の方向の、大日本帝国憲法下の日本が抱えることとなる2つの原理がみとれる註24。しかし、結論としては、翌72年11月の太政官布告第339号「大礼服及通常礼服ヲ定メ衣冠ヲ祭服ト為ス等ノ件」をもつて大礼服と通常の礼服が制定された。明治天皇もまた同年5月より行われた西国巡幸の際には燕尾形の軍服風の服装を着用しており、73年10月に内田九一によって撮影された写真には軍服を召して椅子に掛けた姿が残されている。

一方、皇后の洋装化は天皇ほど急速ではなかったが、1886年に婦人洋服の制が宮内省より内達され、女性の大礼服はマント・ド・クルール、中礼服はローブ・デ・コルテ、通常服はローブ・モンタントと定められた。翌87年には、皇后によって洋装奨励思召書が出される。そこでは「然れども其改良に就て殊に注意すべきは、勉めて我が国産を用ひん事なり。若し能く国産を用ひ得ば、傍

も、いま秋のシーズン前とあつてこの学校だけは夏休み返上の大忙しである。…中略…全日本きものコンサルト協会の調査によれば、一人で着付けができない女性は七〇%に達し、十八―三十九歳に限ると八〇%を越す。どこの家庭でも、きものの着付けは母親から娘に自然に伝えられてきた。つまり母親が、先生だったのが、いまは、その先生が先生でなくなつてきた時代だという。デパートの呉服売り場で集めた調査によれば、一人で着付けができる未婚女性で母親に教えてもらった女性は三五%に過ぎない。着付け教室が繁盛するわけである。同課長は「夜の教室は、お勤め帰りの若い女性がほとんどですが、午前、午後の授業は四十代の女性が非常に多いんです。娘時代を戦中、戦後で過し、着るのはもっぱらモンベだった。きものの着付けを覚える余裕もなく結婚し、母親になつた。そういう女性がたくさん入学してきます」と説明する。註21

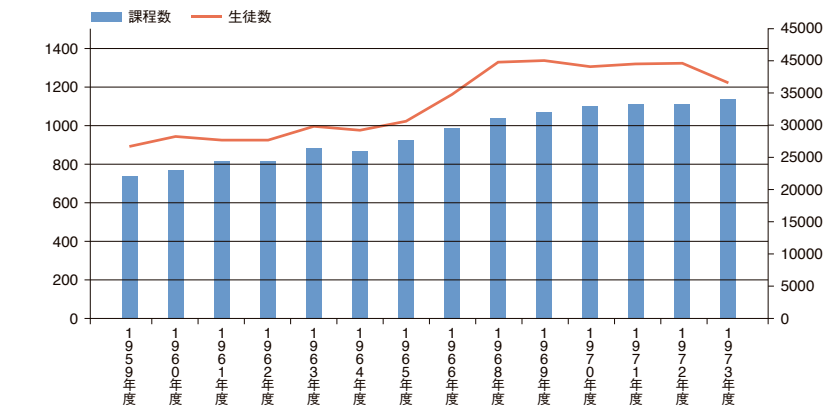


表3：文部省『学校基本調査』(著者作成) 和裁学校の課程数と生徒数の推移

娘だけではない、母親もまた自らの手で着物を着る術を知らない。この時期の娘とは戦後の1945年以降に生まれた世代であり、母親は20年以降に生まれ戦争のなかで青春期を過ごした世代である。以前、拙稿にて明らかにしたように、もんぺを穿いて過酷な日々を暮らした若い女性たちはほとんど着物に袖を通す機会に恵まれていなかった。そして、そのようにして育った彼女たちの多くが、この時期、母親となる。ひとり着物を着ることができないこと、そして、自らの娘たちに教えることができないこと。それは無理からぬことであつた。

さらに、この頃には、多くの研究がさまざまなかたちで示すとおり、新しいささやかな家郷の創造、すなわち核家族の家庭が増加している(註22、23)。したがって、そうしたなかでは、さらに製造の改良をも誘ひ、美術の進歩をも導き、兼て商売にも益を与ふること多かるべく、さては此挙却て種々の媒介となりて、独り衣服の上には止らざるべし」として、洋服の着用と生地 の国産化という殖産興業を推奨している註25。そして、昭憲皇太后の肖像もまたさきの内田が撮影した小桂の和装から、エドアルド・キヨッソーネが描いたマント・ド・クルールの洋装へと、われわれのイメージも変わっていく。

このように、皇室ないし天皇皇后はいわゆる洋服に身を包むことで、近代国家の象徴性を体現せしめていた。そのときの衣装とは決して着物ではない。まして昭憲皇太后は下衣あるいは袴をともしない現在のような着物を、「衣ありて裳なきは不具なり」として認めていない註26。こうした考えはつぎの大正天皇の妻・貞明皇后にも受け継がれた。また、戦禍が激しくなつた1942年に婦人標準服が定められると、皇室では44年に皇室令「宮中ニ於ケル女子ノ通常服ニ関スル件」にて宮中服が考案される。宮中服とは宮廷服とも呼ばれ、通常の帯を要せず袴状の下衣による、いわゆる「二部式」の着物に近い衣服である註27。昭和天皇の妻香淳皇后は終戦後もこの宮中服を着用していたのだが、それをめぐって1949年につぎのような新聞記事が誌面に掲載されている。

皇后さま。あなたのお召になつていらつしやる宮中服のお姿が失礼ながらあんまりおかしいので、一体いつあのような着物が出来たのかときいたら事務官らが考案し秩父宮妃に御相談して昭和十九年に宮中服としてつくられたのだそうでございますね。…中略…天皇さまが国民の象徴でいらつしやるようにあなたは日本女性の象徴であると申し上げてもよいでしょう。…中略…日本女性の外面的な美しさが着物と帯にあるということは内外人のひとしく認めるところであります。もしもあなたが美しくさつぱりとした日本の着物をお召しになつたら、たぶん中年の女性の落ち着いた美しさを世界に認めさせることになるでしょう。失礼ながら皇后様はほどよくおふとりになつていらつしやいますがあなたが日本のキノフをお召しなつたらさぞ堂々としてお立派だろうと思うのです。…中略…私たちは平和な美しい心ばえを、和服をお召しになることによつて中外にお示し下さる日の近いことを祈つています。(註28)

ここでは皇室の宮中服に対して批判の目が向けられるとともに、皇后がこれまでほとんど着用することのなかった、市井の人びとと同じ着物を着用することを勧めており、それによって戦後の「日本女性の象徴」となりうると記している。それを受けてかどうかは不明だが、サンフランシスコ平和条約が発効され日本の主権が回復した前日、1952年4月27日に、天皇皇后は第2代連合国軍最高司令官のマシュー・リッジウェイと会食し、その際に皇后は「はじめて和服を」

着用し、今後は「宮中公式の場では和服を用いられることをきめ」た。記事とともに掲載された写真には洋装の天皇の横で、半喪の服装である「菊花三つ紋付ふじねずみの訪問着に黒地銀糸に桃模様の帯」を召した香淳皇后の姿がある註29。こうして皇后が着物に袖を通す機会は徐々に増えていった。

けれども、このような着物と皇室のイメージを強固に、また決定的に結びつけたのは、現上皇明仁の妻となった正田美智子（現…上皇后）の存在であろう。1958年11月に皇太子との婚約が正式に発表され、多くのマスメディアが大々的に報道した。いわゆるミッシーブームとよばれるものだが、そこで大きな役割を果たしたのが当時『週刊新潮』や『週刊女性』などの創刊が続いた週刊誌であり、『家庭画報』や『婦人画報』、あるいは『戦後の4大婦人雑誌』と称された『主婦之友』や『主婦と生活』などの全盛を極めていた婦人誌であった註30。そこでは彼女の生い立ちや振る舞いなどが詳細に綴られているのだが、なかでも注目されたのがそのファッションであり、ドレスや着物、スポーツ姿などさまざまなスタイルが誌面を賑やかせた。納采の儀での振袖姿ばかりではなく、たとえば、59年新年特大号の『アサヒグラフ』では菊、牡丹など四季の花を紅白の紐で束ねた花東文様の中振袖に、七宝華文の丸帯、本正田の帯揚げを召した美智子妃の姿が表紙を飾っている（図3）。その後も、自身の誕生日を迎えた際のポートレートをはじめ、母となり浩宮や皇太子と一緒に過ごす一時、また平成となり追悼式や慰霊祭をはじめとする式典への出席など、さまざまな場面において着物が着用され、現在のわれわれのイメージへと至っている。

かつて洋服という具象性をして日本の近代国家への歩みを体现していた皇室が、いまや着物に衣替え身を包むことで日本の伝統の象徴性へと書き換えられていく。もちろん、そのときの着物とは決して人びとの生活に根ざした日常着ではなく、またそれを準拠点として和服／洋服という境界を越え出る試みでもない。それは非日常的な祝祭の場を華やかせる盛装の着物であり、その際の「正しさ」を美しく守ることで伝統や民族といった観念を想起させる。日本の伝統、あるいは日本人という民族性を、人びとは皇室の、皇后の、なかでも美智子妃の着物姿のうちに発見することとなる。着物の伝統はこのような新たなピースを得ることで再創造される。

このほかにも、1965年には菅原通済が初代会長を務めた全日本きものコンサルタント協会が設立され、資格認定制度が導入されたり、翌66年には全日本きもの振興会が創設され、11月15日を「きもの日」として全日本きもの女王コンテストが開催されたり、73年には超党派に

註

1. 小形道正2017「生活着の着物と衣服を作ること——終戦から1950年代(上)」『Fashion Talks』6号、40-47頁、小形道正2018「生活着の着物と衣服を作ること——終戦から1950年代(下)」『Fashion Talks』8号、38-45頁。
2. ちなみに1964年に内閣総理大臣官房広報室にうって実施報告された「和装に関する世論調査」というデータがある。たとえば、「あなたは、あなた家では「きもの」を着ていますか、洋服を着ていますか、どちらも着る、かがありますか」という質問に対しては、普段から洋服を着ていると回答した人が45.8%であり、着物を着ていると回答した人の43.2%を上回っている。これは20代以上の女性を対象とした結果であり、拙稿にて論じたことも考慮すれば、この時点で既に着物よりも洋服が多いことは、やはり日常生活のなかで徐々に着物が入びとの生活着ではなくなりつつあることを示唆している。一方、「あなたは婦人会やPTAが集まりに出たり、人の家を訪問したり、遠くへ買物に出かけたりするときには、いつも「きもの」を着ていらっしゃいますか、洋服を着ていらっしゃいますか、別に決まてはいませんか」という質問では、着物を着ている人の割合は52.1%、洋服を着ている人の割合は34.6%であり、着物を着る人が大きく上回っている。この調査は、内閣府と東京大学社会科学研究所で結果に若干の相違があるものの、それぞれデータを公開している。内閣府 <https://survey.gov-online.go.jp/38f539d01-38-16.html>、東京大学社会科学研究所 <https://sjd.ass.u-tokyo.ac.jp/Direct/gaiyo.php?cd=M157>、2021年6月5日参照。
3. 天井知らず「晴着ブーム」『朝日新聞』1967年11月17日。
4. 国民生活研究所1962『経済企画庁委託調査』。
5. 「着物の着かた教えます」『朝日新聞』1972年10月17日。
6. さらに後染め用の白生地、無地ちりめんと駒輪子ちりめん、紋意匠ちりめんの3種類を比較したデータが存在する。そこではまず3つの合計は1050万反から2180万反へと倍増している。なかでも駒輪子ちりめんと紋意匠ちりめんが、それぞれ30万反から350万反の約12倍、10万反から116万反の約12倍と飛躍的な成長を遂げている。すなわち、このことより複雑で、装飾性が高く、高級な白生地がより求められていることを示唆している。藤平昭1969「きもの」をめぐる生産流通の問題点」『被服文化』118号。
7. デラックスな御召の晴着」『美しいキモノ』21号、1960年。なお、現在ではマヨルカではなくマヨルカ（鳥）と呼ぶのが一般的となっている。
8. 本坂ますみ「晴着の常識」『美しいキモノ』53号、1966年。
9. 佐藤茂雄「大塚末子・石橋治郎八・南部あき・滝沢栄輔・吉原正道・前田鉄二」絹のキモノを語る」『美しいキモノ』21号、1960年。
10. 小沢喜美子「きものと季節」『美しいキモノ』17号、1959年。
11. 石津謙介1963「いつどこでなにを着る。――男のTPO事典」婦人画報社。
12. 大塚末子「特集」どこでどんなキモノを着るか?」『美しいキモノ』48号、1965年。
13. 大関早苗「特集」中振袖百科」『美しいキモノ』76号、1972年。
14. 「街で見たきもの」『美しいキモノ』56号、1967年。
15. 武智鉄二の「アクションの効用」どう着るのが本当か」『美しいキモノ』36号、1962年。
16. 「正確に言えば、ひとつひとつの手順がほとんど写真のみで構成されているような場合、自分で着るのかあるいは誰かに着せ付けてもらうのかという違いはより曖昧である。しかしながら、そこには写真だけではなく文字による解説が附記されている。そのため、それらの解説を読むと自分で着るのではなく、着せ付けの記事であることが理解できる。
17. 塩月弥栄子1970「冠婚葬祭入門——いざというとき恥をかかないために」光文社、酒井美意子1970『和服の常識——いつ、何を、どう着るか』三崎書房。
18. 三橋順子2014「『着物趣味』の成立」『現代風俗学研究』15号、54-70頁。

よるきもの議員連盟が結成され（現…和装振興議員連盟）、家庭科教育での和裁授業の拡充や皇族の着用着用の促進などが謳われたり、さまざまな団体組織が結社している。「正しさ」のさきにみえる、やや保守的な、日本の伝統服あるいは民族服といった観念はこうした政治に近しい空間によっても醸成されていった。

もちろん、これらすべては着物が入びとの日常から遊離したがゆえに生じるものにほかならない。女性の幸福という夢幻を、また「正しい」着物という規範を、そして日本の伝統という精神を非日常着となつた着物に入びとは読み込んでいく。これが60年代以降にあらわれた着物の形象である。けれども、こうした形象もまた70年代後半、80年代を迎えるといつしか変貌を遂げていくこととなる。ただし、同時に、この2つの形象の淵には揺るぎない根源が通奏低音のようにして存在している。新たな形象とそれらを繋ぐ布置。このことについては次回に論じることしたい。

著作権の関係により表示できません

図3：1959年新年特大号『アサヒグラフ』表紙

19. この他にも、たとえば、京都でも1964年に服部和子きもの学院、65年に京都きもの学院、67年に西陣織工業組合による西陣和装学院がそれぞれ開校されている。またそれぞれの設立年については各教室のサイトより参照。装道礼法きもの学院 <https://www.sodo.or.jp/>、長沼静きもの学院 <https://www.nagunuma-kinomo.co.jp/>、ハクビ京都きもの学院 <http://www.hakubin.net/>、服部和子きもの学院 <https://kinomomuseum.com/index.html>、京都きもの学院 <http://www.kyoto-kinomo-g.jp/>、西陣和装学院 <http://nishijin.or.jp/>、それぞれ2021年6月5日閲覧。
20. 「学校基本調査」において学校数の調査も開始されるのは1978年度からであり、それ以前は課程数のみとなっている。また、以下本文にて和裁と洋裁の課程数と生徒数の比較を行っているが、和裁と洋裁、そして和洋裁の3つに区分されているのは今回表にした59年度から73年度までの一時期だけである。このような項目の変化それ自体も大変興味深い。それ以前と以後は全体数だけでなく、ひとつに集約されている。なお、この時期の和洋裁の課程数と生徒数については、洋裁同様、大きくその数を減らしている。
21. 「着付け学校」に夏休みはなし」『読売新聞』1970年6月30日。
22. 見田宗介は1960年代の農村から都会へ移動する人びとのなかに生じた、家郷をめぐる「一つの新しい」意味の地平としての心情の磁場の生成」について「きのように明晰に記している。「たとえばホームメイキングとか、ホームビルというような一見軽やかな週刊誌風の標語のかけには、意識の有無にかかわらず、家郷喪失者の群れの、家郷創造（Home-making）の重悲願がこめられているのではないだろうか。家庭化時代とよばれるものの本質は、日本における、「出稼き型」の社会構造生活構造意識構造の解体を予知するものである。「安心立命」の地としての「家郷」はなや、そこから出ててそこに還る、き所与としてでなく、自らここに建設すべき課題として現われはじめる。（家郷は本来、人間がそこから出発する所与の原点としてあった。したがって、家郷の創造とは一つの逆説であり、形容矛盾であらねばならない。そこには実は、日本の民衆についての家郷」の観念の意識されなヘルラス的転回がある。」見田宗介1965「1971」新しい望郷の歌」『現代日本の心情と論理』筑摩書房、67頁。
23. 盛山和夫は形態としての核家族と理念としての核家族化を慎重に区別すべきであると留意しつつも、人口学的要因をコントロールした上で、子ども側の側からみた選択的核家族率が1960年から85年にかけて13.2%から34.5%と大きく増加しているという。また、その結果は通常核家族化の議論に際し扱われるもの多い、「国勢調査に基づく核家族世帯の推移以上の拡大であると指摘している。盛山和夫1993「核家族化」の日本の意味」直井優盛山和夫・岡々田孝夫（編）『日本社会の新潮流』東京大学出版会、3-28頁。
24. 多木浩二1988「2002」天皇の肖像」岩波書店。
25. 明治神宮監修2014『昭憲皇太后実録』上巻、吉川弘文館、401頁。
26. 明治神宮監修2014『昭憲皇太后実録』上巻、吉川弘文館、400-401頁。
27. 帯は決していないわけではなく、「幅二寸五分長サ胴二廻りノ上前面ニ於テ蝶結び」とされている。
28. 「編集手帖」『読売新聞』1949年5月29日。
29. 「『独立』これから」『天皇陛下お喜びを胸深く』皇后さま今後は和服」『朝日新聞』1952年4月28日。
30. 石田あゆむ2008「若い女性」雑誌の時代」『文学』9（2）、138-153頁。小形道正2013「ファッションを語る方法と課題——消費身体メディアを越えて」『社会学評論』63（4）、487-502頁。坂本佳鶴恵2000『女性雑誌の歴史分析』『お茶の水女子大学人文科学紀要』53号、259-264頁。松下圭「1988」昭和後期の争点と政治」『不鐸社。吉見俊哉2002「メディアとしての天皇制」『天皇と王権を考える』第10巻、岩波書店。